

# 保育士・教員養成課程における健康教育に関する一考察 —野口体操の授業における学習経験を中心に—

## Discussion of Health Education in the Childcare and Teacher-Training Courses: Focus on the Learning Experience in the Noguchi Taiso Classes

畑野 裕子\*

Yuko HATANO

大竹 留美\*\*

Rumi OTAKE

滝口 由美子\*\*\*

Yumiko TAKIGUCHI

### Abstract

The authors reviewed free-writing journals written by students regarding practical examples of Noguchi Taiso in order to develop a curriculum for childcare training courses. This paper focused on the learning experience of the Noguchi Taiso classes. The same questions were asked to newly enrolled students at the end of the first school year and at the end of the second school year. The replies were analyzed using a text mining technique.

As a result, the term “Datsuryoku (physical relaxation)”, which was not found in the first-year students’ journals, was found in the journals of the second-year students. Datsuryoku is a characteristic state proposed by Noguchi, the originator. It can be surmised that the students learned the movements of Noguchi Taiso through Noguchi Taiso learning experience.

Key Words: Noguchi exercise, Text mining, Health, Physical fitness exercise

### 1. 緒言

筆者らは、2018年の第一報（畑野ら，2018）において、保育者養成課程のカリキュラム開発に関して、野口体操の実践事例による検討を試みた。またその次報では、第一報（畑野ら，2018）で実施した質問紙調査の設問の「この授業を通しての感想、考えたこと、イメージしたことはどのようなことですか」に関して検討した。本報においては、1年次「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」の設問に対して調査した。そして「在校中に1年次2年次それぞれ、野口体操の授業を受け、感じたこと、考えたこと」を検討した。なお、調査の対象は芸能関係の専門学校での、表現体育の授業の中で、延べ1,588名の学生であった。現在、保育士・教員養成課程で学習する幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の保育内容「健康」、さらに小学校・中学校・高等学校の学習指導要領の体育編・保健体育編においては、心と体のしなやかな発達を促すため「体づくり運動」の中に「体ほぐしの運動」の項目が設けられている。第一報（畑野ら，2018）に引き続き、次報（畑野ら，

2019）においても、専門学校の学生の質問紙調査に基づき、野口体操が、心と体の発達を促す一助となりうるか否かについて考察をした。そして、本報では、野口体操の経験が重なることで、心と体のリラックスにどのような影響を及ぼすかを検討する。

周知のように、野口体操とは、野口三千三氏が創始者である体操であり、体の力を抜きながら動きを自分の体の重さの流れに任せる、独自の動きを行うものである。代表的な動きとして、「尻たたき」「寝によろ・腕によろ」「ももあげ」「おへそのまたたき」「真の動き」「ぶらさげ」「Zの動き」などがある。そして、野口体操はその体操の全体像をみると、動きのみに目を向けるではなく、その創始者である野口三千三氏の語る「言葉」の中も、吟味していくことが必要である。その野口三千三氏の著作には「野口体操おもさに貞（き）く」（2002）、「野口体操からだに貞（き）く」（2002）、「原初生命体としての人間」（2003）、「養老孟司氏との対談形式の「野口体操DVD」（2004）などが、あげられる。野口体操に関する著作をみても、いくつかの書籍はみられるものの、野口体操に関する研究論文に関しては、数少ない。

\*本学大学院教育学専攻教授

\*\*本学大学院修了生

\*\*\*NHK 宇都宮文化センター講師

野口氏の先行研究は、国立情報学研究所（NII）の論文検索CiNii（2019年12月現在）において、39件であった。その先行研究の中で、北村（2015）は、オイリュトミーと野口体操について「ユニークな体操である野口体操を参照項にして、いわば側面からオイリュトミーへの接近を試みたい。」と述べ、シュタイナー教育を理解するツールとして野口体操を実施している。そして、福本（2011）は、イデオキネシスと野口体操の2つのボディーワークを比較研究している。また、虫明ら（2013）は、合唱のウォームアップに関する考察の中で、野口体操を実施していることを報告している。同様に、音楽教育に野口体操を取り入れた梶取（2016）は、教師として「からだ」を生徒にどう伝えるか、音楽の授業の中で「からだ」をどう考えるかを報告している。

以上のように、先行研究をみても、この「野口体操」が、学習や専門分野に取り入れられ、それぞれに、検証されていることがわかる。先行研究が数少ないにも関わらず、いろいろな異種部門での活用が報告されている。そこで、本報では、保育士・教員養成課程のプログラムに野口体操を取り入れるヒントを得ようと、第一報（畑野ら、2018）・前報（畑野ら、2019）に引き続き野口体操について検討を重ねる。

## II. 方法

### （1）調査期間

2001年4月～2011年3月

### （2）対象者

2年制専門学校において、舞台、演劇、映画などの芸能活動を志す学生より、439件を回収した。その中で、今回の質問紙調査についての回答人数は、1年次242人、2年次200人、1年次2年次共に回答している学生は159人であった。その質問紙調査の集計の結果、語句数は、12,359語であった。前報（畑野ら、2018、2019）の指導者と同じく、授業の担当者は、野口三千三氏に師事し、野口体操に精通したT氏であった。T氏は、2001年4月より2013年3月まで、専門学校において身体表現の授業を実践している。

### （3）質問内容

1年次、2年次の身体表現の授業において前・後期の学期末ごとのまとめの要領で実施した。今回の

設問は、1年次は「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次は「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」であった。

### （4）分析の手続き

まず、調査対象者から回収した回答に関して、全ての記述を書き起こした。そして、それらの記載内容に関して、テキストマイニング、KH Coder2.00f（樋口、2001、2014、2015）を用いて分析した。

### （5）1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」に関する構造の把握

1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」に対し、形態素解析を行ない、語句に含まれている名詞句、サ変名詞句、名詞C句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから構造を解釈した。

## III. 結果と考察

### （1）1年次「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」に関する語句の形態素解析と考察

学生の野口体操の授業体験について、計量的分析を行うため、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、野口体操の授業を通して考えたことに関する抽出語総数は、1年次が5,970語、2年次が6,389語、計12,359語であった。

抽出語の中でも、まず名詞句についてみる。表1は、抽出された名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、1年次2年次ともに「動き」であり、それぞれ1年が204件、2年が181件出現している。続いて、1年次が158件、2年次が148件出現した「自分」、1年次「先生」29件、2年次「気持ち」36件であった。また、1年次28件、2年次14件出現している「感じ」が4番目で、5番目には、1年次「学期」が24件、2年次「人間」が14件出現している。

これらの抽出された名詞句について、野口体操との関わりを考えてみる。1年次、2年次ともに「動き」が最も多く抽出されている。これは、前述した

表1 1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」出現頻度5以上の名詞句

順位	1年次	頻度	2年次	頻度
1	動き	204	動き	181
2	自分	158	自分	148
3	先生	29	気持ち	36
4	感じ	28	感じ	14
5	学期	24	人間	14
6	気持ち	23	状態	13
7	身体	18	先生	13
8	最初	12	身体	11
9	部分	12	日常	11
10	感覚	11	最初	10
11	人間	10	部分	9
12	考え	9	流れ	9
13	バランス	8	一つ一つ	8
14	前期	7	感覚	8
15	一つ一つ	6	体調	8
16	気分	6	舞台	8
17	状態	6	バランス	7
18	日常	6	筋肉	7
19	関節	5	エネルギー	6
20	筋肉	5	マッサージ	6
21	言葉	5	学期	6
22	個人	5	姿勢	6
23	周り	5	脱力	6
24	相手	5	何事	5
25	舞台	5	個人	5
26	流れ	5	周り	5
27	場所	5	場所	5
28	中身	5	中身	5
29	内側	5	内側	5
30	疲れ	5	疲れ	5

ように、野口体操の「動き」が、それまで体験してきたラジオ体操、各種スポーツの準備体操とは違い、体の力を抜く「動き」であることが特徴的であり、学生に印象付けられていると考えられる。次に、1

年次2年次ともに「自分」が出現していることから、野口体操は「自分」の意志に任せて動くというより、体の力を抜くことにより生じる「動き」をもとにしていることがうかがえる。

これ以降、1年次、2年次の出現語句に少し違いがみられる。1年次では、「先生」、2年次では「気持ち」が出現している。「気持ち」は、2年次では3番目に、1年次では6番目に出現している。野口体操の経験を積みながら、「気持ち」に対する位置づけが変化してきていることが、このことから推察される。2年次の23番目の「脱力」は、1年次には学習の中で現れてこなかった語句である。これは、野口体操の中では、キーワードともいえる語句であり、2年次になり野口体操の授業を重ねることで「脱力」にも目を向けている学生がいることが推察される。1年次の「言葉」は、野口体操を学ぶにあたり、創始者である野口三千三氏の「言葉」について授業内で触れていることが影響していると考えられる。つまり、これらの抽出語「脱力」「言葉」からは、創始者である野口三千三氏の語る言葉や精神論に基づいて野口体操が行われることがうかがえる。野口三千三氏自身は、「この動きを『体操』と呼ぶことにする」旨をその著書「原初生命体としての人間 野口体操の理論（2003）」の中で述べている。つまり、「体操」とは呼んでいるものの、その言葉に固執しているわけではないと考えられる。加えて、野口体操を忠実かつ確実に、学生に伝えるT先生の意向が、その授業に反映されていると考えられる。また、2年次の23番目の「脱力」は1年次には出現していない語句である。しかし、野口体操の中ではキーワードともいえる語句であり、野口体操の授業を重ねることで「脱力」に目が向けられていると考えられる。前述したように、この専門学校は、芸能関係を目指す学生が多いため、「舞台」の語句も出現しているのではないかと推察される。その「舞台」をより良く実行したい学生たちが、心身の準備体操として野口体操を応用しているといえよう。

次に抽出語の中でも、サ変名詞句についてみる。表2は抽出されたサ変名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「体操」の、1年次77件、2年次116件であり、続いて、「授業」の1年次74件、2年次50件、「リラックス」が1年次42件、2年次33件となっている。4番目は、1年次「イメージ」26件、2年次「意識」の23件で

表2 1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」出現頻度5以上のサ変名詞句

順位	1年次	頻度	2年次	頻度
1	体操	77	体操	116
2	授業	74	授業	50
3	リラックス	42	リラックス	33
4	イメージ	26	意識	23
5	理解	24	イメージ	21
6	表現	21	表現	21
7	緊張	20	緊張	19
8	意味	14	ダンス	16
9	実感	11	演技	14
10	意識	10	集中	14
11	瞬き	10	意味	12
12	ダンス	7	理解	12
13	演技	6	怪我	8
14	関係	6	実感	8
15	成長	6	変化	8
16	生活	6	発見	7
17	運動	5	生活	6
18	応用	5	コントロール	5
19	解放	5	呼吸	5
20	想像	5	瞬き	5
21	体験	5	息	5
22	発見	5	卒業	5

ある。1年次2年次とも出現回数が最も多い「体操」その次の「授業」については、授業の内容が身体表現であり、用いた教材が「野口体操」であったことが影響していると考えられる。共通して3番目に多い「リラックス」は、野口体操を行うことで、身体がほぐれ、「リラックス」できることを示唆している。また、抽出された「表現」「ダンス」「緊張」「演技」の語句については、芸能関係の学習カリキュラムによる授業での調査の結果を検討していることに起因すると推察される。つまり、それらの語句は、芸能関係を志す学生の学習に関わる語句といえよう。そして、1年次には10番目に出現した「意識」は、2年次には、4番目に出現している。1年次には、

表3 1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」出現頻度5以上の名詞C句

順位	1年次	頻度	2年次	頻度
1	体	190	体	199
2	力	72	力	75
3	頭	26	人	39
4	人	21	心	22
5	心	12	腰	17
6	他	11	気	16
7	腰	9	頭	16
8	水	8	形	11
9	家	6	足	11
10	身	6	目	8
11	足	5	海	7
12	風	5	風	7
13			逆	6
14			肩	6
15			水	6
16			奥	5
17			家	5
18			上	5
19			身	5
20			他	5
21			無	5

5番目に出現した「理解」が、2年次には12番目に出現している。「意識」については、1年次から2年次に継続して、授業を受けるにつれて、考えることになったといえよう。加えて、「理解」については、1年次は野口体操を理解しようと考えていたものの、2年次には、「理解」するのではなく自然の動きに任せるようになったといえよう。つまり、1年次と2年次では、「意識」と「理解」は逆の出現傾向があった。

さらに、抽出語の中でも、名詞C句についてみる。名詞C句とは、KH Coderにおける名詞C句を指し、漢字一文字で表された名詞句を抽出したものである。そして、本報においてこの名詞C句が多数抽出語としてみられ、共起ネットワークにも表れているため、表3として掲げた。

表3にまとめた名詞C句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数の多い抽出語は、「体」のそれぞれ1年次190件、2年次199件であり、続いて、「力」が1年次72件、2年次75件、3番目には、1年次が「頭」の26件、2年次は「人」で39件、1年次は「人」の21件であった。1番ずつずれてはいるが、「心」が1年次12件、2年次22件、となっている。これらのことから、学生にとって、野口体操が「体」の「力」を抜く体操であり、今までに経験した体操とは違うものであると認識していることが推察される。野口体操には、他の人と連携を図りながら行う動きがある。野口三千三氏が「人」の「体」は、「頭」と「体」が別ではなく、1つの皮袋の中に流れる「水」とイメージする体を学習していることが多数の抽出語に結びついたと考えられる。また、2年次の6番目に「気」が出現している。これは、1年次には出現しておらず野口体操が「技」にこだわるといよりも、「気」に集中することを学んだことがうかがえる。

## (2) 1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」に関する語句の構造と考察

抽出語間の関連性を探索するために、表1、表2、表3に示した抽出語を含め、出現頻度上位50語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果を1年次は図1に、2年次は図2に示す。

図1、2において、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみってみる。

図1からは、「体」「体操」「自分」「動き」「リラックス」「力」「授業」「気持ち」のまとまりがみられた。野口体操の授業において、関わりの深い語句と推察される。つまり、「体」「体操」はいうまでもなく、野口体操が特徴的な「動き」であり、「リラックス」して「動き」をするのである。そして、「力」の状態は、抜いて、脱力をするのである。言い換えれば、野口体操では、「体」の「力」を抜いて「動き」「リラックス」する「体操」と野口自身が述べている(野口三千三, 2003)。

そして、「イメージ」から「海」「水」「中身」「表現」「変化」「無理」「舞台」とつながっている。学校での授業で、「野口三千三」について知り、「イメー

ジ」していると考えられる。さらに、その野口体操を普段の生活の一端である「表現」「舞台」で活用しているといえよう。「呼吸」「無」「一つ一つ」、「息」、「他」「日常」「生活」「疲れ」のまとまりからは、「呼吸」を整え、「無」になり、「一つ一つ」の動きを大切に、「呼吸」法につながる「息」を意識し、「他」を意識しないで、「日常」「生活」の「疲れ」を解消に導くことを意識していると考えられる。「様々」「集中」「意識」のまとまりは、「集中」することで、「意識」を体に向けるといえる。「場所」「発見」のまとまりには、学生たちが自分で動いて体の部分の「場所」に意識の「発見」をしていることが考えられる。「身体」「へそ」「瞬き」には、まさに野口体操の「おへそのまたたき」の動きを示している。

図2において、まずは共起図の中心に現れた関わりのまとまりから、検討していく。「体」を中心として「動き」「自分」「体操」「リラックス」のまとまりがみられた。これは、野口体操は、筋肉や体力を発達させることを目的とした他の体操や運動というよりもむしろ、「体」の「動き」を「自分」で行い、「リラックス」状態を得ることができる「体操」であることが推察される。そのまとまりから、「力」「緊張」「頭」「感じ」とつながっている。野口体操は「力」を抜いて、「緊張」せず、「頭」で考えないで、「感じ」たように動くのである。「力」は、「リラックス」「体操」ともまとまりがみられる。これは、野口体操が「力」を入れずに、「リラックス」につながる「体操」であることがわかる。「体」「自分」から「授業」「先生」「最初」「意味」「筋肉」「不思議」「いろいろ」のまとまりがみられる。これは、学校での「授業」であり、「先生」の「最初」の「授業」で「意味」を理解するには至らず「いろいろ」「不思議」な授業であるといえよう。初めて野口体操の授業を受けた1年次の調査であることがわかる。また、「表現」「気持ち」「身体」「心」「解放」「自由」「必要」のまとまりからは、「身体」「表現」の授業において野口体操をすることで、「心」を「解放」し、「自由」になる、「必要」であると感じていることが伺われる。「水」「流れ」「イメージ」のまとまりは、野口三千三氏のからだ観である「人間のからだは皮袋の中の液体が主である」という考えが、学生たちに伝わっていることが推察される。

図1、図2の1年次、2年次ともに、中心部分は同じであるのに対し、共起の仕方が違っているのが

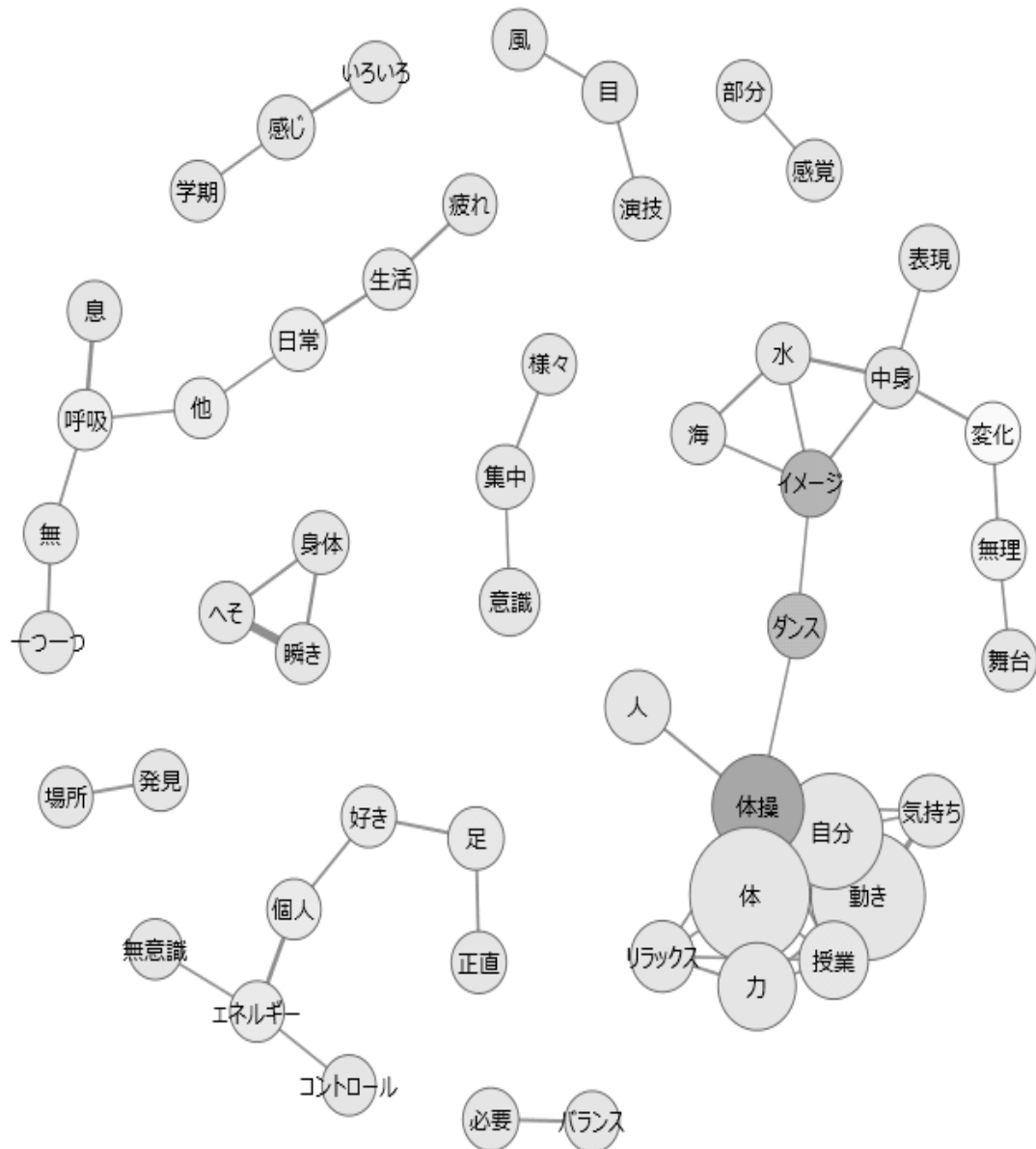


図1 1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」に関する抽出語間の共起ネットワーク

わかる。これは、学習を重ねていくうえで、野口体操を経験したことのない「動き」から生活の中に利用する「動き」に変化していることを、推察できるものである。

また、最初はうまくいかない柔軟性がないからできないなどのネガティブな感情が、2年次には野口体操をすることが楽しい、普通の生活の中に、演劇のダンスの準備に使用しているとの回答も、見られることから、野口体操の位置づけが学生の中で変化していることがうかがえる。今回の共起ネットワークでは、図1、図2において、大きなまとまりは、一つずつ見ることができた。その特徴としては、長くつながっており、野口体操が多くの語句を用いて語られることが考えられる。

### (3)「野口体操」の研究にみられる抽出語に関する特徴的な研究動向の例

先述の心と体をほぐすための手段として、野口体操に取り組み、野口体操を授業や活動に取り入れている先行研究がみられる。その先行研究について、概観していく。

その中で、福本(2011)は、イデオキネシスと野口体操について「ワークにおけるイメージの役割に着目し、身体の内的な状態への気づきの意義を、両ワークの考案者の主張より導きだすことを目的とする。」として、比較研究している。そして、「野口は、効率的な動きを妨げる要因を、外的な基準に頼る傾向があるという個人の次元に見出している。それが、学習者自身が動きを多様なイメージで探求すること

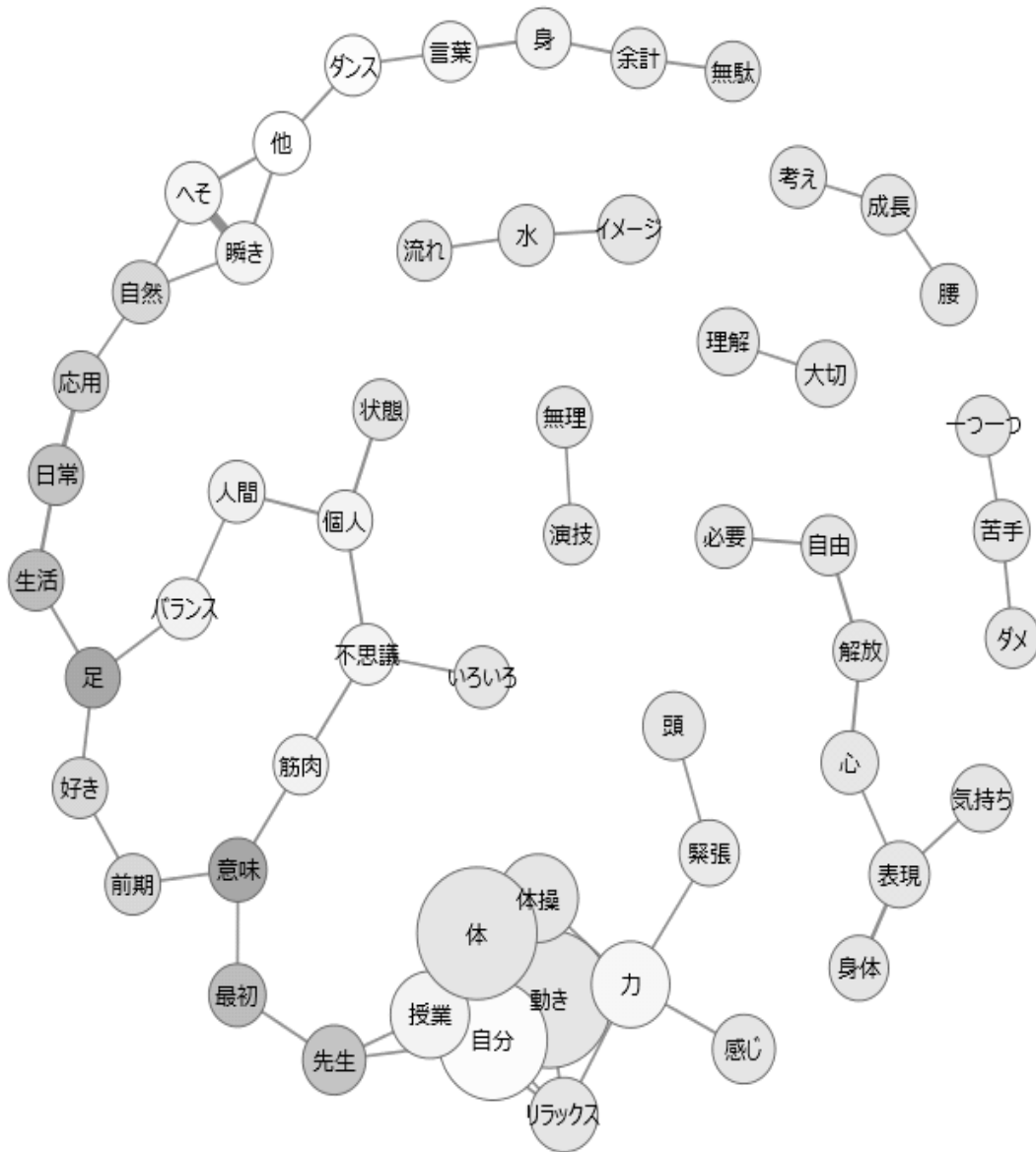


図2 2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」に関する抽出語間の共起ネットワーク

を推奨することにつながっている。」と報告している。また、北村（2015）は、「オイリュトミーと同様に、身体の動きを通じて、記号化した現代人の言葉にその本来の力を回復させようという意図をもっている。それゆえ、両者を、その思想的基盤を視野にいれて比較できれば、オイリュトミーが腑に落ちにくい理由を説明できるかもしれない。」として、シュタイナー教育の理解をするために、野口体操を用いて、検討している。福本、北村の両氏においては、野口体操をそれぞれの研究分野に使用し、比較検討している。つまり、野口体操は、その創始者である野口三千三氏が言うように、また、ラジオ体操のように今までの経験上関わってきた体操とは、異なる体操であることを裏付けているといえよう。そ

して、音楽教育を中学・高校で実施する梶取（2016）は、野口体操について「野口三千三氏（1914～1998）が考案した身体をより良い状態にするためのトレーニング法。人間の潜在的に持っている可能性を最大限に発揮できる状態を準備することを目的とする。（中略）合理的な運動は『重さ』と『弾み』を活かすことで行える。そのためには無駄な力みを捨てて脱力の感覚を磨くことが肝要であるとしている。」とし、梶取の音楽教育の根底に、野口体操があると述べている。さらに、虫明ら（2013）は、「合唱団が行っているウォームアップは、しかし、それぞれの合唱団ごとにさまざまな取り組みがなされているのが現状である。そうした中で、ウォームアップの基礎となっているのが『野口体操』や体

育科の『体ほぐし』で、そこでは『緩める』・『ほぐす』・『身体感覚をひらく』といった感覚が大切にされている。「野口体操が発展したと考えられる、体育科の『体ほぐしの運動』は、『体』とともに『心』をほぐし、解放することを目指している活動」と位置づけている。梶取、虫明らは、それぞれの音楽教育の中で野口体操を使用していると報告している。つまり、前報(畑野ら, 2019)で紹介した三上(1999)の「野口体操からの展望: その1 ほぐす」や、前述の先行研究にもみられるように野口体操は、教育、音楽、舞台と多くの場面での活用をされているといえよう。本報で、対象とした芸能活動を志す学生を教育する専門学校でも、身体表現の授業に野口体操を取り入れ、舞台に立つための準備活動につなげてカリキュラムが組み立てられていることが明らかになっている。

#### IV. 総括

1年次の「授業を通してどのようなことを感じ考えましたか」、2年次の「授業を通して感じたこと、考えたことは何ですか」についての結果から、学生たちにとって野口体操が、自然に生活に根差していることが推察された。そして、この身体表現の授業で野口体操に巡り会い、学生生活の中に、また舞台生活にも浸透していていることが明らかになった。さらに、学生たちが、1年次から2年次になり、理解しながら野口体操をすることが、学習指導要領に位置する「体づくり運動」につながると考えられる。小学校・中学校・高等学校いずれにおいてもその学習指導要領の中で、「体づくり運動」の内容を掲げ、「体ほぐしの運動」が位置付けられている。小学校の体育編、中学校では、学習指導要領・保健体育編に、高等学校では学習指導要領・保健体育編・体育編に記されている。また、現在の保育士・教員養成課程で学習する保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園における教育保育要領の保育内容「健康」においては、次のように記されている。「心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、子どもが保育士等や他の子どもとの温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」つまり、幼児・児童・生徒の教育内容、指導内容には、心と体の健康を育むべくそ

の教育・保育に取り入れることを、目標として掲げられており、保育士・教員はその実施を求められている。

本報では、芸能活動を志す学生を対象に調査し、その結果をテキストマイニングによる検討を試みた。その数は39件と少ないものの、「野口体操」に関する先行研究から、「野口体操」を教育や専門分野に取り入れ、効果を上げていることが報告されており、明らかとなった。そして、長く続けることで、野口体操を生活の一部に取り入れ、自然に実施していることが伺える。

今後も幼児教育・小学校教育・中学校教育・高等学校教育の場面における活用の検討をし、心と体のほぐしに結びつけるべく、保育士・教員養成課程のプログラムに取り入れ、さらなる検討が必要になるであろう。

本報は、2019年7月のECSSプラハ大会(European College of Sport Science Congress Prague 2019)において、ポスター発表(“A Practical Study of Noguchi Taiso in Creative Lesson at A Vocational School in Japan: Effectiveness of Its Repetitive Experiences During Two Years”)を行い、整理しまとめたものである。なお、JSPS科研費(17K04898)の助成を受けた。

#### 参考文献

- 福本まあや(2011) イデオキネシスと野口体操の比較研究--ツールとしてのイメージの役割に着目して、富山大学芸術文化学部紀要, 5: 114-125.
- 畑野裕子・大竹留美・滝口由美子(2019) 保育者・教員養成課程における健康教育に関する一考察: 心と身体ほぐしを目指した野口体操の実践から, 神戸親和女子大学大学院研究紀要, 15: 71-78.
- 畑野裕子・大竹留美・滝口由美子(2018) 保育者養成課程におけるカリキュラム開発に関する一考察: 野口体操の実践事例による検討, 神戸親和女子大学大学院研究紀要, 14: 63-70.
- 樋口耕一(2001) KHcoder (<http://khc.sourceforge.net/>) [最終アクセス2017年10月19日].
- 樋口耕一(2014) 社会調査のための計量テキスト分析: 内容分析の継承と発展を目指して,



ナカニシヤ出版.

樋口耕一 (2015) KH Coder 2.x Reference Manual  
[http://kncoder.net/en/manual\\_en\\_v2.pdf](http://kncoder.net/en/manual_en_v2.pdf)  
〔最終アクセス2017年10月19日〕.

樋口耕一 (2018) KH Coder <http://kncoder.net/> 〔最終アクセス2019年1月26日〕.

梶取弘昌 (2016) 「からだ」とは何か, 武蔵高等学校中学校紀要, 1: 5-20.

北村三子 (2015) オイリュトミーと野口体操: シュタイナー教育の理解のために, 駒澤大学教育学研究論集, 31: 17-37.

厚生労働省 (2008) 保育所保育指針〈平成20年告示〉 フレーベル館.

厚生労働省 (2017) 保育所保育指針〈平成30年告示〉 フレーベル館.

国立情報学研究所 (NII) CiNii <https://ci.nii.ac.jp/>  
最終アクセス2019年11月29日.

文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説〈平成30年3月〉 フレーベル館.

文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/026/siryu/05120701/008.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/026/siryu/05120701/008.htm) 〔最終アクセス2020年1月29日〕.

虫明眞砂子・黒井かおり (2013) 合唱のウォームアップに関する考察II —身体のリラックスの視点から—, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 153: 59-69.

内閣府, 文部科学省, 厚生労働省 (2018) 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本 チャイルド本社.

内閣府 (2017) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館.

野口三千三 (2002) 野口体操おもさに貞(き)く, 春秋社.

野口三千三 (2002) 野口体操からだに貞(き)く, 春秋社.

野口三千三 (2003) 原初生命体としての人間 野口体操の理論, 岩波現代文庫.

野口三千三+養老孟司 (2004) 野口体操DVD, 春秋社.